

フェアトレードから考える国際協力

富山県立高岡南高等学校 二年 山崎 成実

「国際協力」を考えるにあたって、私は今までどんなことができたのだろうか思
い出してみた。小学校のときのユニセフへの募金やフリーマーケットをしてその
売り上げを赤十字へ送ることをした。しかし、本当に国際協力を意識して行っ
いたわけではなく、心のどこかでお金さえ送っていればいいだろうという気持ち
があった。そのお金が何に使われるかもよく理解せず、ただたくさんのお金を集
めてそのお金を送ることに満足をしていた。

そんな私が、初めて国際協力を意識できたのは中学三年生のときだった。講師

の先生を招いての授業を受けたとき、貿易ゲームというゲームをした。このゲームは、配布されたはさみやのりや色えんぴつを用い、紙に描かれた車やバナナ、えびなどに三色の色をぬり製品を完成させていく。あとでその製品に値段をつけたどのグループが一番儲かったかを競う。足りない道具は、ほかのグループと貿易を行い道具を借りて製品をつくっていく。このゲームを四十分間行った。

ゲームを終えたあと発表された結果を聞いてとても驚いた。一位のグループと最下位のグループでは、五倍以上の差があったからだ。なぜそんな差ができたのかというと、一位のグループは最初に配布された道具の数が多いう上に、作っていた製品が車だったからだ。また最下位のチームは、初めに配布された道具が非常に少なく、作っていた製品はえびだった。道具がたりないため、他のグループに道具を借りたにいったが、このグループが持っているものはずでどのグループも持っているためなかなかほしい道具を借りられなかったという。

私のグループは、バナナを作った。配布された道具は、一位だったグループよりは少なかつたが最下位だったグループよりは多かつた。そして売り上げはちょうど真ん中ぐらいの順位だった。

このゲームを行ったあと初めて国家間の差というものを理解できたと思う。先

進国は、ありあまる富を使い、高価で売れる車を発展途上国に売って儲けているが、発展途上国は低価でしか買ってもらえないえびをひたすら生産して先進国に売っている。車は機械で大量生産できるが、えびはほぼ手作業で世話をしている。それなのに、先進国は本当に安い価格でしか輸入しない。私はこれを知ったとき、なぜか罪悪感でいっぱいになった。貿易は利益を得ることが目的だし、えびと車が同等な価値で取り引きされるのはおかしいと思う。が、しかしこの差はあんまりだと思った。

このゲームを行ったあと一本のビデオを見た。ガーナの子供たちが、木に登りカカオの実を採っているビデオだ。この子供たちは一日中カカオの実を採り、休むことが許されないという。休もうとしたらムチで打たれ無理矢理働かされるのだ。驚いたことに、この子供たちは自分たちが採ったカカオの実が何に使われるか知らないという。もちろんチョコレートを口に入れたことはない。私たちは、ガーナの子供たちのおかげでチョコレートを食べているのに、この現状を知らないでいてはいけないと思った。

このビデオを見終わったあと、講師の先生は「フェアトレード」で取り引きしたチョコレートをくださった。「フェアトレード」とは製品をつくるにあたった

労働に対して正式なお金を払って取り引きすることだ。講師の先生から頂いたチョコレートは、口の中でふわっと甘い味が広がり、いつものチョコレートより格別に美味しかった。そしてガーナの子供たちに感謝しながら味わった。

「国際協力」とは何をすればよいか分からなかったけれど「フェアトレード」で取り引きされた製品を買うことなら私にもできると思った。労働に対して同等的な価値のお金を払った製品を買うことで、私は本当の意味での「国際協力」ができた気がした。